



## 「羅針盤」

岩本 正敏

澤さんに初めてお会いしたのはMINNETの準備会でした。宮城県を活力のある県にしようと、澤さんの声掛けで志のある方が集まりました。澤さんは良く通る声で、産学官民連携と異業種交流の必要性、そしてコミュニティの重要性と作り方、課題について歯切れよく明快に話されました。

普段は異なった立場で活躍している産学官民が、同じ市民として集まるMINNETは、私にとって刺激的な場所でした。同じ街に住んでいるのに、初めてお会いする素敵な方々と、ビールを片手に、名刺交換、自己紹介を繰り返し、次第に仲間が増えていきました。

この活動を繰り返すことで参加者は仲間との関係から宮城県を変えていく志を共有する同志に育って行きました。さらに、この街にこんなに素晴らしい考えを持ち、活動が続いている方がいらっしやるのかと驚き、自分の住んでいる街の素晴らしさを再認識することができました。

MIMINETの活動に参加するようになり、異なった立場の人たちが同じ街で活躍し、競い合いながら、助け合い、支えあう姿は斬新で気持ちの良いものでした。次第に、自分も宮城県のために頑張らなければいけないとの気持ちになりました。

MIMINETの講演会では、米国シリコンバレーの市民活動の様子など、世界的なムーブメントとして始まった新しい街づくりについても学ぶことができました。澤さんのMIMINETに対する思いは熱く、今が宮城県を変えなければいけない時期だと繰り返し私たちに強力なメッセージを送り続けました。

私たちのグループ「メカトロで遊ぶ会」はMIMINETが立ち上がる以前から、小学生を対象としたロボット工作教室を開催してきました。この会を立ち上げたのは、社会人、大学生が参加し、毎年開催している知能ロボットコンテストの仲間です。ロボコンのためにロボットをチームで開発することが人材育成に繋がっていくことを体験しており、その人材育成の方法を小学生にも体験させ、創造性豊かな人材育成を行いたいとの願いから始めた活動です。仙台市を活動拠点とし、仙台市科学館、市内の小中学校で教室を開いております。

また、宮城県立西多賀養護学校（病弱支援学校）の保護者からの要請で、東北大学の電気通信研究所のスタッフと協力し、中高生に対してコンピュータ操作指導も行っており、保護者からは、電動車椅子を常時使用しており、それは体の一部になっている。その子供がコンピュータやロボットに関する知識を持ち、コンピュータやロボットの知識・技能を理解し活用することは、障がい者が自分のことを知ると同じくらい大切なことで、将来、ロボット技術により不自由なく生活できる希望を障がい者に持たせたいとの願いがありました。

私たちがMIMINetに参加するようになり、MIMINetの関係者から多くの支援を受けるようになりました。この頃（一九九六年）、インターネットの家庭への普及のため、NTTがインターネット体験キャンペーンを行っており、NTT回線を一年間無料で提供できるとの話をいただきました。このとき、西多賀養護学校で私たちはコンピュータ教室を開催しており、障がい者が学ぶ教室からインターネットが使えれば嬉しいことをNTTに伝えると、回線提供について快諾をいただきました。

仲間と養護学校の教室をインターネット接続しようと計画していることを、大学でお世話になっている米国のコンピュータメカの方にしたところ、その計画について手伝いたいとの申し出があり、検討いただくことになりました。一週間くらいしてか

ら、ネットワーク・ワークステーションを寄贈したいが、米国本社から条件が付けられたとのことでした。条件は、寄贈者を公開しないこと、コンピュータが動作している期間の保守サービスは仙台営業所の担当者の自主的社會活動で行うことでした。米国本社でも、日本の障がい者教育に自社コンピュータが利用されること、社員が社會活動に参加することを大変喜んでいただいたようです。当時としては、小型で高性能の最新のワークステーションを寄贈いただくことになり正直驚きました。四百万円はしたと思います。そこで、学校側と寄贈について打ち合わせを行い、生徒、保護者、学校関係者にも大変喜んでいただきました。

ところが、県庁と事務的な手続きを始めたところ、県庁から幾つか条件がだされ、それに対応するため、NTT、米国コンピュータメーカーの担当者の方には不愉快な思いをさせてしまいました。それでもなんとか設置準備が整ったとき、さらに県庁から、学校の電源コンセントは使用できないが、どうするのかとの問い合わせをいただきました。寄贈、設置は認めるが、電気の使用は認められないとのことでした。

これにはほとんど困り、澤さんにお電話いたしました。澤さんは私が説明するこれまでの経緯を電話口で黙ってお聞きになり、部局が違うのでお役にたてないかもしれないが、少し時間がほしいとのこと、電話口でかなり落胆しているように感じました。

数日後、澤さんからお電話をいただきました。県庁内で処理したので、まもなく担当者から連絡がいくから、コンピュータの設置準備を進めてくださいといつも明るい声で要件だけの短い電話でした。後になってわかったのですが、澤さんは知事に直接話され、県庁内の調整にご苦労されたようでした。報告のため澤さんにお会いした際、無事、養護学校の教室がインターネットに繋がりが生徒がインターネットの利用ができるようになり、生徒たちの明るい活動の様子や未来への希望を抱く様子と学校関係者の感謝の気持ちなどを報告すると、長時間の私のとりとめのない話しに、じつと何かを吸収するように耳を傾けておられました。

こうした澤さんの支援を得て、生徒は外部との交流にも積極的に参加するようになりました。MIMINetからの支援を受けながら、一九九六年七月には異業種交流グループ「みやぎ情報交流推進グループ(MJKS)」が障がいを持った生徒の就労に繋げようと在宅で仕事ができる「バーチャル授産所」の活動を始めました。また、同年の十月には全日本教育工学協会の大会が仙台で開催された際、高等部の生徒四名が「インターネット公開ディベート」に参加することができました。一九九九年には、障がい者の在宅就労を支援するボランティア団体「CyBird」やMIMINetが主催し、高等部の生徒の職場実習が行われました。また、障がい者の社会参加を支える環境整備を行うため、宮城県が会場で開催した「チャレンジドフォーラムみやぎ」そして、その会

場で開催された「チャレンジド天才異才塾」の活動に繋がっていきました。これも澤さんが県庁内から我々の活動を支えていただいたのだろうと感じておりました。

ある時、澤さんからお電話をいただきました。産業振興予算でものづくり教室が開催できるので、メカトロで遊ぶ会でロボット工作教室を開催して欲しいとのことでした。お話を伺うと、子供たちに喜んでもらいたいので、一人五千円の教材費も県の予算から出すようにしたとのことでした。もちろん快諾し、宮城県の事業として、県内の小中学校をメカトロで遊ぶ会のメンバーと訪問しロボット工作教室を開催しました。石巻市の田園風景の綺麗な小学校で開催した際には、教室が終わり、スタッフが車に片づけた荷物を積み込んでいるとき、教室に参加した数名の小学生がロボットを握りしめ、器用に自転車の片手運転で近づいてきました。ロボットをカバンに入れて両手で自転車に乗らなきゃだめだよという、ロボットを離したくないし、片手でもへっちゃらと我々の心配をよそに、夕日のあぜ道を何度も何度もこちらを振り返りながらロボットを大きく振って帰っていきました。その様子を澤さんに報告したところ、よかった、本当によかった、ありがとう、と感謝の言葉をいただきました。この時の澤さんの声がいまでも聞こえます。

澤さんからは多くのことを学ぶことができました。澤さんは子どもや、障がい者の明日のことを気かけながら、常にふれることなく、私たちに進むべき道を示していただきました。澤さんが示した羅針盤の道を見失うことなく歩み続けることが、私たちに課せられた大切なことであると考えています。

澤さんに心から感謝申し上げますと同時に、澤さんのご冥福をお祈りいたします。

(現在…東北学院大学工学部准教授、「メカトロで遊ぶ会」代表)



## 「若き同志」が残したもの

川村 志厚

澤さんから電話があつて「ちよつと話が聞きたいから遊びに来ませんか」という。その口調に心地よい柔らかささと自信とが感じられて、この人には会ってみたいなと思わされた。

私は、地方自治体の重要ポストに二年間ほど出向してくる中央官庁のキャリアに對して、それまであまり良い印象を持っていなかった。世間の実情に疎いのにやたらエリート意識が強いという感じを受けていたからである。

澤さんと最初に会ったときの情景を今でも鮮明に記憶している。一九九五年九月初旬の午後、晩夏のまぶしい青空が見える商工労働部次長室だった。読みかけの英書が無造作に机上に置いてある。前年に米国で出版されたHenry Kissingerの「DIPLOMACY」であった。数日前に同書を読み終えていた私は、偶然に驚き「なぜその本を読んでいるんですか」と聞かざるを得なかった。「政治力学の渦中で政策がどんなプロセスで実現していくかに興味があるんですよ」というのが答えであった。それがいかにも自然で力みがなかった。澤さんの方では、同書に関して話題にできる



「民間人」が仙台にもいることで、私に興味を持ったのだと思う。聞かれるままに私の略歴と関心の所在を話すことになった。

六十年安保騒動の学生時代にK、マルクス、M、ウェーバー、K、ポPPERに没頭し主要著作を原書で読破したこと、国際金融分野とコンサルティング分野で過ごしてきたこと、ヨーロッパ滞在時にボランタリーな地域活動に関わったこと、現在の関心事が「開かれた社会」における「経済と社会」の在り方として「地域の経済と社会の相乗的活性化」にあること、スマートバレーの運動が示すように「情報技術」が社会変革の鍵となる予感がすること等に及んだ。

話し終えると、澤さんからは、県の産業振興に情報化政策を織り込むため、具体的なアクション・プランを検討しているところだから、民間セクターの参画を促す仕掛けづくりに協力してほしい。呼びかけ人としてサイエンスパーク施設「テクプラザみやぎ」の菊池隆雄さんが適任と思うがどうかと、実に率直な提案があった。私は、前年から同施設の実施事業である「養賢堂起業家セミナー」に関わり、加えて施設周辺地域でスマートバレー的な運動を起こそうと準備していた関係で、菊池氏とは懇意の間柄であったし、澤さんの提案が自分の関心事に驚くほど合致していることに運命的

な出会いを感じた。澤さんとは数度にわたる打合せをとおして、仕掛けづくりの基本的なフレームを決め、参加者に説明することになった。

こうして始まった「宮城情報交流推進グループ」(MJKS)の活動が紆余曲折を経ながらも発展し、「MIMINet」(ミヤギモデル・イニシヤティブ・ネットワーク)として、数々の先駆的なプロジェクトを立ち上げ、全国的に知名度を高めていくが、支援協議会の設立を機に行政との役割分担関係が曖昧となり、次第に運動体としてのエネルギーを失っていくこととなる。この間の事情について、澤さんの立場から、初期の編著「民意民力 公を担う主体としてのNPO/NGO」(二〇〇三年 東洋経済新報社)第四章「公務員はNPO活動にどうかかわるか — MIMINetの体験から」に詳しく述べられている。澤さんは、この章を書くため、私から直接再度のヒアリングを行い、原稿段階で内容確認の依頼をされた経緯にある。細やかな配慮を怠らない澤さんらしい対応ぶりであった。

私の勝手な推測ではあるが、澤さんがNPO/NGOのような民間セクターの社会活動に強い関心を持っていたのは二〇〇二年くらいまでではないかと思う。旧通産省機械情報産業局情報処理振興課、同電子政策課、通商政策局総務課の課長補佐を歴任

した後に宮城県商工労働部次長として出向した一九九五年は、一月に阪神淡路大震災がありボランティア元年となり、八月にWindows95が発売されネットワーク元年となり、九月には加藤敏春さんの「シリコンバレー・モデル」が上梓され話題となる等、MININETを仕掛けるに最適の環境にあり、澤さんのそれまでの行政経験が自ずと待望されるような年であった。

澤さんが宮城県庁在任中に残した功績は極めて大きいと思う。県庁関係の功績等については、吉田祐幸さんはじめ県庁関係者の方々の追悼文に縷々述べられているところである。MININETその他の民間関係者の追悼文にも拙いながらそれぞれの思いが溢れていると思うが、MININETの活動が全国の地域活動・社会活動に及ぼした影響は非常に大きかった。全国紙等主要なマスコミからの取材もあり、他団体との見学や意見交換の機会も多かった。

現在からすると変哲もない活動ではあるが、一九九五年当時は、NPO/NGOという言葉すらほとんど知られておらず、産官学民が協働するボランティアなネットワークという存在もなかったことを考えれば、澤さんの先見の明は並外れていたといえる。ちなみに、一九九六年十一月には東京で日本NPOセンターが、翌年十一月には仙台にせんだい・みやぎNPOセンターが設立され、一九九八年十二月NPO法(特

定非営利活動促進法）施行後のNOP／NGOの発展ぶりは周知のところである。したがって、MINNETの先駆的運動体としての役割は、二〇〇〇年頃までに終えたのだと考えられる。

MINNETの活動への参加者は延べ数百人になるが、彼らが、澤さんのいう「政策議論の場としての第二層と第三層」として、とりわけ第三層の「良質な一般市民層」として成長していることは疑いのないところである。これも澤さんの大きな功績だと思ふ。

一九九七年七月に本省に戻ってからは、経産省産業技術環境局環境政策課長、資源エネルギー庁資源燃料部政策課長等を歴任し、環境・エネルギー分野の政策研究に主要な関心が向いていたと思われるが、澤さんにとっては、まさに水を得た魚のごとの分野であり、日本における環境・エネルギー政策の第一人者として誰もが認める存在となった。地方でつましく活動している身からすると、別世界の雲の上の人という感じではあるが、偶々会う機会があつて歓談すると、以前と変わらぬ率直で柔らかな人柄であつて、あの笑顔に癒されたものである。

私個人として、澤さんの志をほんの少し引き継いだのではないかと自負しているこ

とがある。東北地方の自治体職員の研修施設である東北自治研修所で、一九九六年、二〇一二年の間、東北六県の自治体中堅職員研修及び課長級研修において「NPOと行政」の講義を担当し、累計千三百名余の職員に「公務員はNPO活動にどうかかわるか」を説き続けたことである。

この講義では、NPOと行政の協働事例のひとつとして、MIMINetの活動と澤さんの果たした役割を紹介したが、受講職員の多くが非常に感動したという感想を書いている。

澤さんは、私にとっては、価値観において理解しあうことができる「若き同志」ともいえるべき存在であった。今となっては、人間観や国家観について語り合う機会が欲しかったと切に思う。

(現在…経営デザイン研究所代表、MIMINet座長)



## 澤昭裕氏と名刺の話

菊池 隆雄

名刺録を探したところ平成七年六月十五日付けの名刺が見つかり、当時の記憶が蘇ってまいりました。「今回通産省から出向してきた次長は面白い奴だ。」との噂を聞いて面会に行き、宮城県商工労働部次長室に入ると、奥のデスクにふんぞり返っていたのが、噂の主人公澤昭裕氏でありました。話ぶりも生意気極まりなく、当時私が四十七歳、氏は三十八歳であり、内心穏やかならぬものを抱きつつ、話を伺ううちに、「これは本物だ。」と氏の見識の深さと洞察力に感じ入り、この若造の子分になることを決めたものでした。

さらに名刺録をめくると、平成九年六月二十日付工業技術院人事課長の名刺が出てきました。私と若造との二年間の刺激的な物語を綴ります。

最初の面会の折、氏の名刺録を見せてもらうと、産業界だけでなく、市民活動家が多くみられ、「これからは、こういう人たちが、世の中を動かすのだ。ITとネット社会の重要なプレイヤーとなる。」と言われ、市民活動家に会うことを勧められました。

当時の私の立場は、平成六年四月に三菱地所から(株)テクノプラザみやぎの常務取締

役として出向し、同社の使命が中小企業支援、ベンチャー発掘と支援活動にあり、私の役割はその方策を企画し実行することになりました。そこで、プライスウォーターハウスの仙台代表の川村志厚先生に依頼し、既存の養堅堂帝王学塾をベンチャー発掘を目的とした養堅堂起業家セミナーに衣替えし、専門の講師の講義を聴きながら、ビジネスプランを作成する方式に改め、川村先生には講師選定とビジネスプラン作成の指導をして頂くことにし、当時二十名ぐらゐの塾生を集め立ち上げたところでした。

平成七年（一九九五年）は八月にウインドウズ95が発売され、空前のITブームが訪れ、IT、インターネット、マルチメディアの熱狂の渦の中、大きな「揺らぎ」を肌で感じる時代でした。川村先生は、「インターネットはコミュニティにおけるボランティア経済の有力なツールになる。」と提唱し、私は意味を理解できないまま、何かをしなくてはという熱気だけを感じていました。その空気の中に、澤昭裕氏が忽然と宮城県に降臨なさった訳けであります。

澤氏にとり川村先生は宮城県における最初の理解者でした（私は理解者のなりそくないですが）。そうこうしているうちにMKS（宮城情報交流推進グループ）の基本が二人で話し合わせ、私は実行部隊として、赴任後日数も無いにも拘らず多くの人に会われた澤氏の名刺録を頼りに、各界の色々な人に面会を求め、勉強会づくりに奔走

しました。

勉強会メンバーの筋ジストロフィーの子供さんの親から、お子さんが通う西多賀養護学校のパソコン教室を支援して欲しいとの要望が出され、勉強会メンバーである、テクノプラザ入居企業のエイエスインドウ平井社長と通研電機工業池原所長と共に同校を訪問しました。同校の先生が、指の力が弱りマウスを使うことができない生徒達のために、穴をあけた発泡スチロールの箱に、逆さまにしたマウスを埋め込み、マウスボールを指で操作するガムテープだらけの器具を作り生徒に使わせておりました。その涙ぐましい努力に、池谷所長と若手社員は心を打たれ、「自分達の技術でこれは製品化できる。」とその場で断言し、数日後には試作品を作り、同校に通い始め、やがて実用に耐えるものを完成しました。

私はこの現場に立ち会い、コミュニティのニーズと産業界のシーズが、ITに裏打ちされたボランティアな場において、自然にマッチングした瞬間を目撃したわけです。ここで初めて澤氏と川村先生が提唱していることを理解できました。大きな産業界においては非常にささやかなものですが、全く新しい手法の萌芽であると確信し、この手法の普及に向けた組織化に動き、澤氏の指導で、川村先生を座長、私が事務局長としてMJKS（宮城情報交流推進グループ）を平成七年十月に立ち上げました。

また、同校において、エイエスインドウは、自治体から受託しているホームページ



作成の仕事の一部を生徒たちに任せ、「バーチャル授産所のプロジェクト」を始めることになり、MJKSのリーディングプロジェクトの一つになりました。

MJKSが立ち上がり、メンバーの宮城生協で進めている高齢者への宅配事業にインターネットを活用できないかとの話が持ち上がり、フィールドは生協が提供し、ハードは企業が提供する「こーぷ ふれあいネットワーク」という社会実験を行うことになりました。実質的には澤氏がメーカーに声掛けし、主なメーカーが全て顔をそろえました。アマゾンが産声を上げたか否かの時期に、仙台という地方都市でこれが成立したのは、澤昭裕氏の面目躍如といったところでしょうか。

その後数々のプロジェクトが立ち上がりましたが、このコンセプトに基づき自然に出来上がったものばかりで、澤氏の先見性を改めて立証したと言わざるを得ません。澤氏は平成九年四月後任の小川潔氏にMJKSを委ね、東京に栄転しました。送別会ではMJKSのメンバーが大勢集まり、惜しまれるなか仙台を去りました。その後、平成九年四月MININETに再編され、澤氏の志は平成九年八月にMININET支援協議会として、県全体の運動体として実現することになりました。

私の名刺録の平成九年六月二十日は澤氏が通産省大臣官房企画調査官を伴い「こいぶ ふれあいネットワーク」プロジェクトの進捗視察に訪れた時でした。「業務ではなくボランティアとして始めたものなので、ズーと繋がっていたい。」と話していただきました。

これで宮城県での澤氏の話はこれで終わりますが、数年後偶々東京駅でお会いしたときは東京大学教授の肩書でした、また、最近はテレビで良くお見かけしました。私は既に独立し、産ソリューションという不動産会社を経営しており、ソーラー発電事業（土地取得、権利取得、開発許可取得後のプロジェクト譲渡）を業としており、再生可能エネルギーより原子力発電や火力発電に重きを置く澤氏の主張は私と利害が反するので、ハラハラしながら見ておりました。現に、政府の政策は世論次第で変わり予測不可能な時代でした。しかし、高名な学者や専門家を向こうに回し、否応なく論破する姿に我ながら溜飲を下げたものです。すなわち、そろばん勘定のない感傷的再生エネルギー礼賛主義に対する警鐘として理解しておりました。

十二月ごろ澤氏を囲む会を開く予定と聞いておりましたが、今般の訃報に接し、真に残念の極みでございます。「安らかにお眠り下さい。」と申し上げたいところですが、澤さんには安穩の地はございません。あの世でも、高名な学者達をケチヨンケチヨンに論破し、やっつけている姿が目には浮かびます。私も、もう少してそちらに伺います

ので、改めて名刺交換をお願い申し上げます。その時は何の肩書になっておりますでしょうか。  
合掌

(現在..株式会社産ソリューション 常務取締役、MINNET事務局長、  
元株式会社テクノプラザ常務取締役)



## あたたかいこころ

白鳥 さち子

平成六年かねてより念願だった宮城県立西多賀養護学校（当時）に高等部が開校しました。高等部設置運動に係わった親としては、記念すべき年でした。

生徒の多くは、次第に筋力が低下し、進行していく筋ジストロフィー症という病気を背負っておりました。開校後、彼らのこれからの学業や、生活に役立つことを考え、一人に一台のパソコンが備えられました。日常生活では、介助を要する彼らもパソコンがあれば、健常者と同等のことが出来るのではと思うとともに、パソコンを通して彼らの社会参加の可能性を模索し、多くの方々に相談しました。そして、生徒のほか、同じ病氣と闘っている方も参加できるパソコン教室の開催となりました。講師には、大学の先生方や、企業に勤めている方々に、ボランティアでご協力いただきました。その繋がりが基となり、全国に先駆けて彼らの学校で、インターネット環境を作っていただきました。

そんな折、MINNetの菊池さんより、その定例会に出席のお誘いを受けました。事情も分からないまま参加した私は、出席者の多くが情報関係の企業の方々ばかりで、場違いのような気がしました。

自己紹介の機会に私は、前述のパソコン教室のことを話題にし、教室は立ち上げたものの、次のステップとして彼らの就労の道はなかなか見えないことなどお話ししました。すると、すぐある企業の方から「ホームページの作成という仕事がありますよ。」と言っていたきました。その反応の早さに驚くとともに、それまで抱えていた不安が消え、目の前が明るくなるのを感じたものです。そして、それはネットを介しての女川の捕鯨ランドのホームページ作りとして、職場実習の形で授業の中に取り入れていただきました。

このMININETの支援は、「西多賀プロジェクト」として、症状にあったマウスの開発や、その頃は珍しかったCD-ROMでの卒業アルバム作りなどたくさんの方の支援に広がっていきました。また、このパソコン教室は、パソコンを利用しての、障害者の就労支援組織の設立へとつながりました。この就労支援の活動は、行政と企業からパソコンのスキルアップのための機器や場所などの援助を受けながらのものでしたが、節目節目では全国ニュースになるなどTV、新聞で報道されることになりました。

また、MININETに参加されていた方が、広島に転勤になり広島の高養護学校に、子供たちのためのインターネット環境を作ってくださいだったとのことで、その学校の教頭先生から「宮城の活動のおかげです。」とお礼状が届きました。宮城の活動が、広島へと広がりを見せたのです。

このことは、まさに澤さんが仕掛けられた、MIMINETの趣旨そのものの動きでした。MIMINETに参加するまでは、行政に出かける時は、その多くは福祉課でしたが、澤さんや、MIMINETの方々のおかげで、商工労働部に行くことが多くなり、時代の変化を肌で感じ取ることができました。何度目かにお会いした時「人の苦しみや悲しみを、理解するのは難しいけれど、寄り添うことは出来る。」とご自身の体験を交えながら話された澤さんの言葉は、その後の私にとっての指針になりました。

私の亡き娘の「あたたかい ころ」の文字が、縁あって関西の企業の研究所に記念碑として建立されております。この碑をデザインされた丹下健三事務所の方によれば、デザインのコンセプトは、誰もが持っているあたたかいころが、時には固い殻で覆われているが、それがやぶれて、あたたかいころの種が世界中に飛び立っていく様子を表したとのことでした。

澤さんの持つあたたかいころの種が、この宮城の地におりて根をはってくれたのだと思います。

ご冥福をお祈りいたします。